

論文

縄文時代中期における磨製石斧の特徴 — 棚畑遺跡における出土資料の分析を中心に —

平澤 愛里

これまでに縄文時代の磨製石斧に関して数多くの研究がなされてきた。磨製石斧研究の画期となったのは、1970年代の鳥浜貝塚の発掘であり、木製の石斧柄の発見と分析から、縄文時代において磨製石斧は、木材加工の機能を担っていたと結論付けられてきた。一方で、近年、広域流通やデポの観点から、磨製石斧に実用的な用途の利用に加えて、何らかの付加価値が付与されていた可能性が示唆されはじめた。日用と非日用の2つの側面をもつ可能性のある磨製石斧の実態に迫るためには、従来とは異なった手法により磨製石斧の研究を行っていく必要がある。

本稿では、長野県茅野市に所在する棚畑遺跡から出土した磨製石斧について、形態・石材・色という3つの視点からの分析を総合的

に解釈し、磨製石斧のもつ特徴に迫ることを試みた。

その結果、①形態については、中期中葉から中期後葉に転換が見られる、②石材については、特定の石材を好んで選択しているが、「きまり」のようなものは見られない、③磨製石斧の素材は、「緑」の石が選択された傾向がある、④当初磨製石斧と同様に伐採具としての機能を持っていたとされる打製石斧には、「緑」の石を選択するという傾向がみられない、という結論をえて、縄文時代の磨製石斧が緑の石を指向する特徴を明らかにした。また、緑という特徴が原動力となり、中期から後期にかけて、磨製石斧の価値が転換していった可能性について言及した。

I. 研究の視座

1. 磨製石斧に関する研究史と問題の所在

日本における縄文時代の磨製石斧の利用法の研究の画期となったのは、1970年代に行われた鳥浜貝塚の発掘による木製の石斧柄の発見であろう。残念ながら石斧が柄に装着された状態で見つかってはいないが、鳥浜貝塚からは、木の幹と枝のマタを巧みに利用して作った石斧柄が大量に出土しており、道具としての磨製石斧の形態がかなり明確に把握できるようになったといえる。また、この遺跡の発見と発掘によって木製品の加工法もかなり明確となり、伐採具というだけでなく伐採から加工までを賄う木材加工具として磨製石斧の利用が想定されるようになっていった¹⁾。

鳥浜貝塚での石斧柄の発見を機に、実験考古学的手法から縄文時代の磨製石斧利用の実態解明を目指しているのが山田昌久らである。東京都立大学人類学誌調査グループの実験考古学班は、鳥浜貝塚出土の石斧柄を参考に製作した石斧柄を装着して伐採の実験を行い（三山ほか2002）、磨製石斧の耐久性や使用痕の付き方、伐採の際に生じる欠損の状態などという磨製石斧の使用に関する詳細なデータを蓄積し、磨製石斧の利用の実態に迫りつつある。他にも、磨

製石斧について、形態・石材・流通・民族事例との照らし合わせという様々な視点から研究が試みられており、磨製石斧利用の実態の解明が目指されている。

縄文時代において、磨製石斧が木材加工具としての機能を持ち、利用されていたのはほぼ間違いないであろう。一方で、磨製石斧の中には、木材加工具という日用の道具としての磨製石斧の利用に取まらなると捉えられるものも存在する。秋田県上掬遺跡や岩手県日戸遺跡等で出土している長大かつ精巧な磨製石斧や、定角式磨製石斧にみられるデポ（田中 1995、田中 2000）、蛇紋岩製磨製石斧にみられる広範囲に及ぶ流通（池田 2006）は、磨製石斧が日用の木材加工具としての機能の他に何らかの価値をもっていた可能性を示唆する事例であると考えられている。また、縄文時代前期末～中期初頭になると北陸地方や長野において、定角式磨製石斧に類似する形態の特徴をもつ「玉斧」と呼ばれる石製品が見られるようになったり（長崎 1984）、中期末葉になると東北地方において、「斧状土製品」と呼ばれる磨製石斧に類似した形態の特徴をもつ土製品が製作されていたりする（阿部 2012：1 頁）。「玉斧」や「斧状土製品」に関しては、縄文人の精神世界に深くかかわるとされる「第二の道具」であるとの見解が示されているが（長崎 1984：287 頁、阿部 2012：13 頁）、出土点数の少なさや特異性からか研究は少なく、その実態はあまりわかっていない。しかし、これらの類似品・模造品も人々の磨製石斧に対する関心の高さを示す一つの指標といえよう。

1994 年になると、佐原真が、国内外の「斧」に関する民族誌や実験考古学の成果等を踏まえ、磨製石斧の日用的な利用の側面と非日用的な側面の両方の視点を用いて縄文時代における磨製石斧の経済的・社会的意味の検討に取り組んだ（佐原 1994）。磨製石斧研究については、前述したように形態・石材・流通・機能といった多岐にわたる視点から研究が行われており、それぞれについての研究の蓄積も多い。しかし、それらの研究は、磨製石斧のもつ一側面の掘り下げに終始してきた点に問題があるといえる。日用の道具としての価値に加え、「第二の道具」的な価値もあわせもっていた可能性がある磨製石斧が、縄文時代の社会においてどのような意義を有していたのかということの検討は、形態や石材といった磨製石斧の一側面から行うことは難しい。磨製石斧の意義について更に理解を深めるためには、佐原が行ったように、今まで蓄積されてきた磨製石斧の様々な側面に関する研究と知見を援用しながらも、個々の側面を総合的あるいは相対的に検討していくことが必要である。

2. 目的と方法

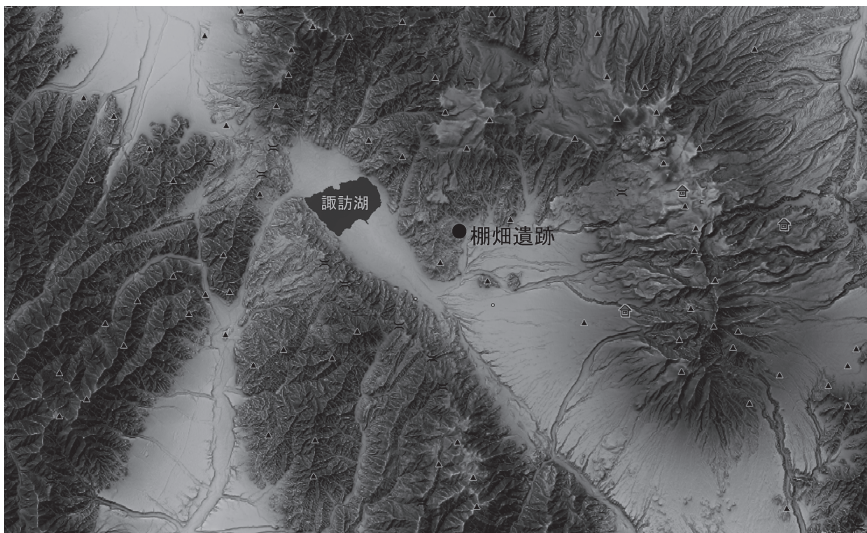
本稿では、縄文時代の社会において磨製石斧がどのように利用され、どのような価値を持っていたかということへの理解を更に深めるために、磨製石斧のもつ特徴を明らかにすることを目的とする。先行研究における課題を踏まえ、従来個別に研究されることの多かった、形態・使用された石材・色という3つの観点から同一の遺物について分析を行い、磨製石斧のもつ視認可能な様々な特徴を総合的に解釈する。

本稿においては、主として長野県茅野市米沢に所在する棚畑遺跡（第1図）から出土した磨

製石斧を分析の対象とした。棚畑遺跡の所在する米沢地区は、八ヶ岳山麓台地の北端を断ち切って流れる上川の沖積地と、そこに流れ込む霧ヶ峰の南斜面を流下する小溪流によって形成された小扇状地状の地形からなり、八ヶ岳西南麓一帯では最も開けた土地である。湧水・陽当たり恵まれたこの地は、縄文人にとって好地であったといえ、前期末諸磯 a 式期～中期後葉までという比較的長い期間において連続して生活が営まれており、時期が連続した中での遺物の変化を読み取ることができる。

棚畑遺跡から出土した磨製石斧 70 点（第 1 表）について、形態・石材・色の 3 項目がそれぞれ時期ごとにどのように推移するのか分析し、導き出される事実を整理した。また、石材・色の 2 項目については、同じく棚畑遺跡から出土した打製石斧 80 点（第 2 表）についても同様に分析をおこない、磨製石斧の分析結果と比較を行った。鈴木次郎は、打製石斧の系統的な分析を行い、縄文時代早期～前期前半の打製石斧が伐採具としての機能を担っていたこと、前期後半に乳棒状磨製石斧の普及によって打製石斧が土堀具へと転化していったということを明らかにしている（鈴木 1983, 小川 2001: 123 頁）。本稿においては、当初は磨製石斧と同様に木工具としての機能を有していたと考えられている打製石斧と磨製石斧を比較することにより、磨製石斧のもつ特徴を明確にしたい。

先行研究により、磨製石斧は製作技法から概ね局部磨製石斧・擦切磨製石斧・乳棒状磨製石斧・定角式磨製石斧の 4 種に分類されている（長田 2012）。本稿においてはその中でも、遺跡の住居の痕跡や出土木材との照合が可能であるとされ（三山ほか 2002: 23 頁）、かつ、広範囲にわたって定型的な技術での製作が確認されている、乳棒状磨製石斧・定角式磨製石斧を主対象として考察を行うこととした。なお、本稿で扱った磨製石斧・打製石斧を一覧にした第 1 表・



第 1 図 棚畑遺跡立地図

平澤愛里

第1表 棚畑遺跡出土磨製石斧

番号	出土遺構	時期(遺構)	長さ(cm)	幅(cm)	断面	石材名	色調	色の名前	欠損等	図版番号-ページ-番号
1	7住	中期初頭Ⅱ	12.2	4.4	I	御荷鉾緑色岩類	7.5GY 7/2	Grayish Yellow Green	刃部なし	0057-7-14
2	132住	中期初頭Ⅱ	12.7	4.5	I	御荷鉾緑色岩類	2.5G6/2	Pale Green	刃部なし	0367-388-2
3	104住	中期中葉Ⅰ	14.1	5.6	I	御荷鉾緑色岩類	7.5GY6/2	Grayish Yellow Green(鳩色)	上端部なし	0279-282-24
4	〃	〃	8.1	4.3	Ⅱ a	御荷鉾緑色岩類	10GY7/2	Pale Green	刃部なし・上端部われ	0279-282-25
5	147住	中期中葉Ⅰ	18.4	5.3	I	御荷鉾緑色岩類	5G5/2	Grayish Green	刃部われ	0394-419-26
6	156住	中期中葉Ⅰ	4.7	3	不明	変質輝緑岩	10Y7/2	Grayish Yellow Green	上端部なし	0418-447-6
7	157住	中期中葉Ⅰ	10.5	4.4	I	御荷鉾緑色岩類	7.5YR6/4	Light Brown	上端部なし	0423-451-10
8	〃	〃	11.6	5.2	I	御荷鉾緑色岩類	5GY6/2	Grayish Yellow Green	刃部なし・上端部なし	0423-451-11
9	〃	〃	7.5	4.4	V	輝緑岩	5G6/2	Pale Green	上端部なし	0423-451-12
10	155住	中期中葉Ⅱ	14.4	4.9	Ⅱ a	御荷鉾緑色岩	7.5G5/2	Graish Green	刃部再生か?	0416-445-3
11	18住	中期中葉Ⅲ	13.6	2.5	Ⅱ a	不明	10YR7/2	Brownish Pink	刃部なし	
12	27住	中期中葉Ⅲ	14.5	6.9	Ⅳ	御荷鉾緑色岩類	7.5GY 5/2	Grayish Olive Green	刃部われ・上端部なし	0104-80-7
13	84住	中期中葉Ⅲ	15.7	3.7	I	変質輝緑岩	5GY7/2	Grayish Yellow Green	刃部われ	0221-223-3
14	106住	中期中葉Ⅲ	7.8	3.6	Ⅲ	石炭片岩	7.5G6/2	Pale Green		0287-291-12
15	108住	中期中葉Ⅲ	15.8	4.6	I	御荷鉾緑色岩類	2.5G7/2	Pale Green	刃部なし	0291-298-3
16	〃	〃	12	3.2	I	御荷鉾緑色岩類	7.5G6/2	Pale Green	上端部なし	0291-298-4
17	119住	中期中葉Ⅲ	12.6	4.6	Ⅱ a	御荷鉾緑色岩類	(7.5YR6/4)	Light Brown	刃部われ	0331-344-56
18	〃	〃	15.9	4.6	I	輝緑岩	(5GY6/2)	Grayish Yellow Green	上端部なし	0331-344-57
19	〃	〃	11.4	5.3	I	御荷鉾緑色岩類	(5GY7/2)	Grayish Yellow Green	刃部なし・上端部われ	0331-344-58
20	〃	〃	7.8	3.5	V	御荷鉾緑色岩類	(2.5G7/2)	Pale Green(玻璃緑)	刃部われ	0331-344-60
21	〃	〃	7.3	4.5	不明	変質輝緑岩	(N4/0)	Gray	刃部のみ	0331-344-61
22	〃	〃	10.8	4.1	Ⅱ a	変質輝緑岩	(10GY6/2)	Brownish Pink	刃部なし	0332-345-62
23	〃	〃	10	4.1	Ⅱ a	変質輝緑岩	(5GY8/2)	Pale Yellow Green	刃部のみ	0332-345-63
24	〃	〃	6.3	3.3	Ⅲ	チャート	(7.5GY8/2)	Pale Yellow Green	刃部われ・上端部なし	0332-345-64
25	153住	中期中葉Ⅲ	13.8	4.1	I	変質輝緑岩	5G7/2	Pale Green	刃部・上端部われ	0413-441-8
26	85住	中期中葉Ⅳ	4.6	3.6	I	御荷鉾緑色岩類	N4/0と10YR6/4	Glaz & Brownish Pink	刃部なし・上端部われ	0223-225-11
27	〃	〃	9.4	3.4	Ⅱ a	御荷鉾緑色岩類	2.5GY7/2	Grayish Yellow Green	刃部われ	0223-225-12
28	〃	〃	5.9	4.5	Ⅱ a	輝緑岩	2.5G7/2	Pale Green	刃部われ・上端部なし	0223-225-13
29	91住	中期中葉Ⅳ	14.2	4.2	Ⅱ a	御荷鉾緑色岩類	10GY7/2	Pale Green	刃部われ	0236-240-10
30	〃	〃	5.5	4.1	Ⅱ a	変質輝緑岩	10GY7/2	Pale Green	刃部われ・上端部なし	0236-240-11
31	100住	中期中葉Ⅴ	17.9	4.5	V	御荷鉾緑色岩類	N3/0, 2.5G6/2	Glaz&Pale Green	刃部われ	0259-264-13
32	110住	中期中葉Ⅴ	9.2	3.7	Ⅲ	超塩基性岩類	10G3/2	Dark Grayish Green(海松藍)	刃部・上端部なし	0301-308-11
33	60住	中期中葉Ⅵ	11.5	5.4	Ⅲ	チャート	10YR7/2	Brownish Pink	刃部・上端部われ	0180-173-2
34	30住	中期後葉Ⅰ	10.7	4.7	Ⅱ a	変質輝緑岩	10GY5/2	Grayish Green	刃部・上端部なし	0111-87-2
35	41住	中期後葉Ⅰ	10.2	5.6	Ⅱ b	輝緑岩	10GY6/2	Pale Green	刃部われ・上端部なし	0135-117-5
36	〃	〃	9.7	4.5	Ⅲ	チャート	5G7/2	Pale Green	刃部なし	0135-117-6
37	〃	〃	7.7	2.4	V	チャート	5G4/2	Grayish Green		0135-117-7
38	〃	〃	4	4.5	不明	チャート	10GY7/4	Light Yellowish Green	刃部なし	0135-117-8
39	〃	〃	3.6	4.1	Ⅲ	チャート	5G5/2	Grayish Green	上端部なし	0135-117-9
40	〃	〃	5	5	Ⅲ	チャート	10GY7/2	Pale Green	刃部なし	0135-117-10
41	62住	中期後葉Ⅰ	6.5	5.2	Ⅲ	チャート	2.5GY6/2	Grayish Yellow Green	刃部なし	0182-176-3
42	92住	中期後葉Ⅰ	16.1	4.6	Ⅱ a	御荷鉾緑色岩類	5GY6/2	Grayish Yellow Green		0240-244-8
43	127住	中期後葉Ⅰ	8.6	5.8	Ⅲ	変質輝緑岩	10YR8/2	Pale Yellowish Pink	刃部のみ・上端部なし	0357-375-2
44	5住	中期後葉Ⅱ	13.1	5.3	I	御荷鉾緑色岩類	5GY 7/2	Grayish Yellow Green	刃部なし	0050-5-1
45	9住	中期後葉Ⅱ	6.1	5.9	Ⅲ	チャート	5G 4/2	Grayish Green(若竹色)	上端部なし	0060-32-1
46	〃	〃	5.9	1.8	Ⅲ	輝緑岩				
47	12住	中期後葉Ⅱ	6.8	3.8	Ⅲ	緑泥片岩	10G 4/2	Grayish Green(青摺)		0067-39-1
48	17住	中期後葉Ⅱ	3.5	1.6	V	チャート	N9/0	Wite	刃部なし	0080-52-3
49	32住	中期後葉Ⅱ	13.4	4.6	Ⅱ a	御荷鉾緑色岩類	5GY 6/2	Pale Green	刃部・上端部なし	0116-94-5
50	〃	〃	11.7	2.9	Ⅱ a	御荷鉾緑色岩類	5GY 6/2	Pale Green	上端部なし	0116-94-6
51	68住	中期後葉Ⅱ	4.3	1.6	Ⅳ	御荷鉾緑色岩類	2.5G7/2	Pale Green	刃部なし	0194-189-2
52	〃	〃	6.1	5.5	Ⅲ	御荷鉾緑色岩類	10G6/2	Pale Green	刃部・上端部なし	0194-189-3
53	93住	中期後葉Ⅱ	12.1	4.5	Ⅲ	御荷鉾緑色岩類	10GY8/2	Very Pale Green	刃部われ・上端部なし	0244-248-11
54	〃	〃	12	5.8	Ⅳ	不明	5Y8/2	Pale Yellow		0244-248-12
55	123住	中期後葉Ⅱ	4.3	4.4	Ⅲ	御荷鉾緑色岩類	5GY7/2	Grayish Yellow Green	刃部なし	0346-361-3
56	26住	中期後葉Ⅲ	7.2	5.7	Ⅱ b	不明	7.5GY 7/2	Grayish Yellow Green	上端部なし	0102-77-2
57	66住	中期後葉Ⅲ	7.9	3.2	Ⅳ	輝緑岩	5BG5/2	Grayish Green	刃部われ	0190-185-6
58	〃	〃	10	6.3	V	硬砂岩	N7/0	Gray	刃部なし	0190-185-7
59	〃	〃	6.1	4.2	Ⅱ a	変質輝緑岩	10GY7/2	Pale Green	刃部・上端部なし	0190-185-8
60	〃	〃	11.4	3.9	Ⅱ a	御荷鉾緑色岩類	7.5GY6/2	Grayish Yellow Green	刃部潰れ・上端部も潰れ	0190-185-9
61	2住	中期後葉Ⅳ	10.7	6.2	Ⅲ	粘板岩	10GY 3/2	Dark Yellowish Green	刃部・上端部われ	0042-12-5
62	8住	中期後葉Ⅳ	8.6	3.7	不明	チャート	10GY 8/2	Very Pale Green		0059-30-2
63	57住	中期後葉Ⅳ	6.2	5.1	Ⅱ b	チャート	2.5G5/2	Grayish Green	刃部われ	0168-159-11
64	〃	〃	2.2	1.8	Ⅲ	ヒスイ				0168-159-12
65	101住	中期後葉Ⅳ	12.4	4.8	Ⅱ a	御荷鉾緑色岩類	7.5G7/2	Pale Green(霞浅葱)	刃部再生途中	0265-270-13
66	〃	〃	10.2	4.1	不明	御荷鉾緑色岩類	N4/0	Gray	上端・刃部・背面欠損	0265-270-14
67	129住	中期後葉Ⅳ	11.1	5.3	Ⅲ	変質輝緑岩	N4/0	Gray		0362-380-2
68	136住	中期後葉Ⅴ	10.1	4.6	Ⅲ	変質輝緑岩	5GY7/2	Grayish Yellow Green	刃部なし	0376-399-8
69	〃	〃	9	5.7	Ⅲ	チャート	5GY6/2	Grayish Yellow Green	刃部なし	0376-399-9
70	〃	〃	7.5	4	Ⅲ	チャート	5BG4/2	Grayish Green(錆青磁色)	刃部なし	0376-399-10

縄文時代中期における磨製石斧の特徴

第2表 棚畑遺跡出土打製石斧

番号	出土遺構	時期	石材名	色調	色の名前	ページ - 図版番号 - 番号
1	39住	前期Ⅳ	緑泥片岩	10YR7/4	Light Yellowish Brown	0126-108-2
2	59住	前期Ⅳ	石墨片岩	5G6/2	Pale Green	0177-169-1
3	16住	中期初頭Ⅰ	変質輝緑岩	7.5G 7/2	Pale Green	0077-49-8
4	〃	〃	石墨片岩	2.5BG 7/2	Pale Green	0077-49-9
5	〃	〃	不明	7.5YR 6/4	Light Brown	0077-49-10
6	40住	中期初頭Ⅰ	緑泥片岩	5G8/2	Very Pale Green	0131-113-3
7	〃	〃	砂岩	N6/0	薄墨色	0131-113-4
8	〃	〃	輝緑岩	5GY7/2	Grayisy Yellow Green	0131-113-5
9	〃	〃	石墨片岩	N5/0	灰色	0131-113-6
10	7住	中期初頭Ⅱ	石墨片岩	10G 7/2	Pale Green	0057-27-6
11	〃	〃	〃	5BG 5/2	Grayish Green	0057-27-7
12	〃	〃	〃	10G6/2	Pale Green	0057-27-8
13	〃	〃	緑泥片岩	2.5BG 6/2	Pale Green	0057-27-9
14	〃	〃	変質輝緑岩	10GY 6/2	Pale Green	0057-27-10
15	〃	〃	緑泥片岩	10GY 6/2	Pale Green	0057-27-11
16	〃	〃	石墨片岩	N4/0	鈍色	0057-27-12
17	27住	中期中葉Ⅲ	硬砂岩	N6/0	薄墨色	0104-80-1
18	〃	〃	御荷鉾緑色岩類	5G5/2	Grayish Green	0104-80-2
19	〃	〃	硬砂岩	N6/0	薄墨色	0104-80-3
20	〃	〃	硬砂岩	10YR 6/2	Broenish Pink	0104-80-4
21	〃	〃	石墨片岩	N6/0	薄墨色	0104-80-5
22	〃	〃	硬砂岩	N7/0	薄鈍色	0104-80-6
23	48住	中期中葉Ⅳ	泥岩	N6/0	薄墨色	0146-131-2
24	〃	〃	砂岩	N5/0	灰色	0146-131-3
25	53住	中期中葉Ⅳ	硬砂岩	N6/0	薄墨色	0158-153-1
26	〃	〃	輝緑岩	N4/0	鈍色	0158-153-2
27	〃	〃	粘板岩	N4/0	鈍色	0158-153-3
28	〃	〃	輝緑岩	5Y6/2	Grayish Yellow	0158-153-4
29	60住	中期中葉Ⅳ	玄武岩	N5/0	灰色	0180-173-1
30	85住	中期中葉Ⅳ	硬砂岩	N6/0	薄墨色	0223-223-3
31	〃	〃	絹雲母片岩	2.5G9/2	Very Pale Green	0223-223-4
32	〃	〃	硬砂岩	N6/0	薄墨色	0223-223-5
33	〃	〃	泥岩	5Y7/2	Grayish Yellow	0223-223-6
34	〃	〃	緑泥片岩	7.5GY7/2	Grayish Yellow Green	0223-223-7
35	〃	〃	安山岩	N4/0	鈍色	0223-223-8
36	〃	〃	粘板岩	2.5PB4/2	Grayish Blue	0223-223-9
37	〃	〃	輝緑岩	5G6/2	Pale Green	0223-223-10
38	3住	中期中葉Ⅴ	粘板岩	N4/0	鈍色	0045-15-3
39	37住	中期中葉Ⅴ	輝緑岩	5G6/2	Pale Green	0124-104-3
40	55住	中期中葉Ⅵ	石墨片岩	7.5G7/2	Pale Green	0162-150-2
41	〃	〃	輝緑岩	5Y7/2	Grayish Yellow	0162-150-3
42	83住	中期中葉Ⅵ	硬砂岩	N7/0	薄鈍色	0218-220-5
43	〃	〃	変質輝緑岩	7.5GY8/2	Pale Yellow Green	0218-220-6
44	22住	中期後葉Ⅰ	不明	7.5BG 5/2	Grayish Green	0089-63-2
45	〃	〃	硬砂岩	5Y7/2	Grayish Yellow	0089-63-3
46	33住	中期後葉Ⅰ	変質輝緑岩	2.5G6/2	Pale Green	0119-97-2
47	36住	中期後葉Ⅰ	砂岩	N7/0	薄鈍色	0122-101-2
48	73住	中期後葉Ⅰ	泥質ホルンフェルス	N5/0	灰色	0202-198-1
49	81住	中期後葉Ⅰ	変質輝緑岩	N4/0と7.5GY7/2の層	鈍色とGrayish Yellow Greenの層	0216-217-3
50	〃	〃	硬砂岩	N6/0	薄墨色	0216-217-4
51	〃	〃	変質輝緑岩	2.5G7/2	Pale Green	0216-217-5
52	82住	中期後葉Ⅰ	変質輝緑岩	5GY7/2	Grayish Yellow Green	0218-219-1
53	10住	中期後葉Ⅱ	緑泥片岩	7.5GY 8/2	Pale Yellow Green	0064-35-1
54	15住	中期後葉Ⅱ	石墨片岩	N4/0	鈍色	0074-46-1
55	23住	中期後葉Ⅱ	石墨片岩	2.5BG 5/2	Grayish Green	0094-68-1
56	〃	〃	硬砂岩	N6/0	薄墨色	0094-68-2
57	25住	中期後葉Ⅱ	緑泥片岩	7.5GY 6/2	Grayish Green	0099-74-2
58	29住	中期後葉Ⅱ	御荷鉾緑色岩類	7.5G 4/2	Grayish Green	0109-85-3
59	32住	中期後葉Ⅱ	変質輝緑岩	N4/0	鈍色	0116-94-2
60	〃	〃	泥岩	2.5GY6/2	Grayish Yellow Green	0116-94-3
61	42住	中期後葉Ⅱ	硬砂岩	N6/0	薄墨色	0137-119-2
62	〃	〃	硬砂岩	N6/0	薄墨色	0137-119-3
63	43住	中期後葉Ⅱ	変質輝緑岩	10GY8/2	Very Pale Green	0139-122-1
64	70住	中期後葉Ⅱ	粘板岩	N3/0	黒楡	0197-191-3
65	〃	〃	輝緑岩	2.5BG7/2	Pale Green	0197-191-4
66	72住	中期後葉Ⅱ	硬砂岩	N6/0	薄墨色	0200-194-4
67	74住	中期後葉Ⅱ	石墨片岩	7.5G6/2	Pale Green	0205-201-2
68	80住	中期後葉Ⅱ	輝緑岩	N5/0	灰色	0215-216-1
69	66住	中期後葉Ⅲ	輝緑岩	5G6/2	Pale Green	0190-185-3
70	〃	〃	粘板岩	N5/0	灰色	0190-185-4
71	〃	〃	石墨片岩	5Y8/2	Pale Yellow	0190-185-5
72	2住	中期後葉Ⅳ	緑泥片岩	5BG 8/2	Very Pale Green	0042-12-3
73	〃	〃	硬砂岩	N6/0	薄墨色	0042-12-4
74	8住	中期後葉Ⅳ	緑泥片岩	2.5BG 8/2	Very Pale Green	0059-30-1
75	13住	中期後葉Ⅳ	輝緑岩	N7/0	薄鈍色	0071-42-1
76	57住	中期後葉Ⅳ	緑色片岩	10GY6/2	Pale Green	0168-159-10
77	75住	中期後葉Ⅳ	砂岩	5Y7/2	Grayish Yellow	0207-205-1
78	〃	〃	石墨片岩	N4/0と10YR7/2	鈍色とBrawnish Pink	0207-205-2
79	〃	〃	砂岩	10YR6/2	Broenish Pink	0207-205-3
80	〃	〃	粘板岩	7.5B5/2	Grayish Blue	0207-205-4

第3表 編年対応表

時期区分	関東	中部	棚畑遺跡時期
中期		梨久保	中期初頭 I
		籠畑 I	II
	五領ヶ台 I	II	中期前葉 I
	II a	九兵衛尾根 I	II
	II b		III
	II c	九兵衛尾根 II	IV
	五領ヶ台直後		V
	勝坂 I	猪沢	中期中葉 I
		新道	II
		藤内 I	III
	II	井戸尻 I	IV
	III		V
		曾利 III	VI
	加曾利 E I	曾利 I	中期後葉 I
II	II	II	
III	III	III	
IV	IV	IV	
	V	V	

時期区分	関東	中部	棚畑遺跡時期	
早期	茅山	細久保		
前期	花積下層	+	前期 I	
	関山	神ノ木		II
	黒浜	有尾		III
	諸磯	南大原		IV
		上原		V
	十三菩提	下鳥	VI	
		晴ヶ峰	VII	

時期区分	関東	中部	棚畑遺跡時期	
後期	称名寺	+	後期 I	
	堀ノ内 I	+		II
	II	+		III
	加曾利 B I	+		IV
	II	+		V
	III	+		VI
	曾谷・安行	+	VII	
晩期		佐野 I	晩期 I	
		II		II
	氷	I		
		II		

第2表に記した、遺物の時期・長さ・幅・石材名は、報告書（棚畑遺跡発掘調査団 1990）の記載に基づいたものである。時期については、報告書において用いられた呼称をそのまま使用した。近隣地域の土器編年に対応させたものが第3表である。色調・欠損等については実見にてデータを収集した。

II. 分析

1. 形態

本稿においては、棚畑遺跡出土磨製石斧 70 点について、土谷崇夫の磨製石斧の形態分類（土屋 2007：232 頁）を参考としながら I～V 類に分類し、時期ごとの形態の変化を分析した。II 類については更に a と b の 2 つに分類した。

磨製石斧の分類（第2図）

I 類：体は紡錘形または乳棒状で、断面形状が円形ないし楕円形を呈するもの。いわゆる乳棒状磨製石斧。

II 類：断面形状が長楕円形を呈するもの。

II a 類：II 類のうち、形態が乳棒状磨製石斧に近いもの。

II b 類：II 類のうち、形態が定角式磨製石斧に近いもの。全面が研磨されている。

III 類：断面形状は、主面がやや丸みを帯び、両側面は研磨され平滑であり、主面と側面の角が明瞭であるもの。いわゆる定角式磨製石斧。

Ⅳ類：断面形状が隅丸矩形または矩形を呈するもの。

Ⅴ類：断面形状が半円状のもの。

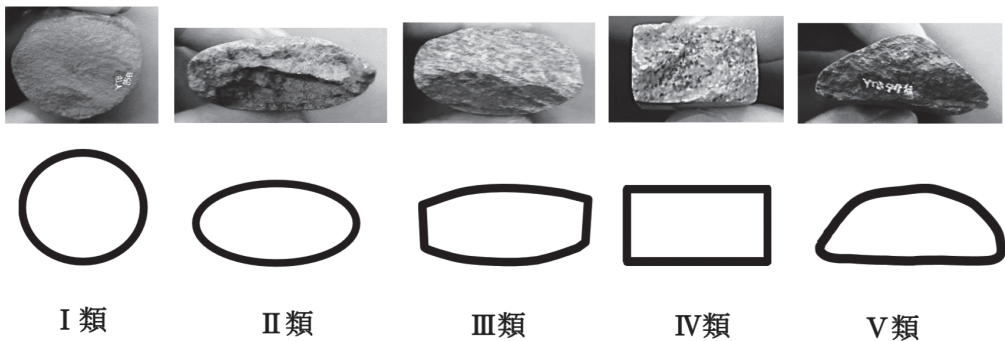
なお、Ⅰ類とⅡ a類、Ⅱ b類・Ⅲ類・Ⅳ類はそれぞれ製作技法の似たタイプである。本稿では前者を「乳棒状磨製石斧系統の石斧」、後者を「定角式磨製石斧系統の石斧」と呼称する。また、損傷が激しい・未成品等で断面形状・形態の認定が不可能なものについては「不明」とした。

柵畑遺跡は、前期諸磯 a 式期から人々が生活したことが確認されているものの、前期～中期初頭Ⅰ式期の住居からは磨製石斧は出土していない。続く中期初頭Ⅱ期～中期後葉Ⅴ期の資料の分類から磨製石斧の形態に関する分類を行い、第4表のような結果をえた。

分類の結果、柵畑遺跡においては当初、乳棒状磨製石斧が主体として使用され、中期後葉になると定角式磨製石斧が主体を占めるようになっていったということがわかった。

製作技術の変遷と流通という視点から磨製石斧の研究を行った長田友也は、① 乳棒状磨製石斧は前期中葉・黒浜式期には関東地方で出現しており、それ以降関東地方から東海地方以西にかけて盛行し、その後関東地方においては後期以降に定角式磨製石斧が主体となっていくこと、② 定角式磨製石斧は、前期前半に東方・北陸地方で緒元とみられる両側面を研磨した石斧が出現し、中期中葉以降には蛇紋岩製定角式磨製石斧の大規模製作遺跡の成立により北陸地方を中心として関東・中部高地・東海・関西まで拡散していくようであることの2点を指摘している(長田 2012: 67 頁)。関東地方と北陸地方の中間に位置する柵畑遺跡については、当初は関東地方に由来をもつ乳棒状磨製石斧を利用していたものの、中期中葉Ⅴ期・Ⅵ期になるとそれまで主体を占めていた乳棒状磨製石斧がみられなくなり、中期後葉Ⅰ期以降になると、東北・北陸地方に由来をもつ定角式磨製石斧が主体として使用されるようになっていったと考えられる。

柵畑遺跡において磨製石斧の形態の変化がみられる中期中葉末から中期後葉にかけての時期は土器型式からみると、関東地方では勝坂式や阿玉台式のようないくつかの土器型式が加曾利 E 式に収束する時期であり、柵畑遺跡の立地する八ヶ岳西南麓地域や山梨県域では井戸尻式や勝坂式が曾利式に収束していく時期にあたる。つまり、中期中葉においては各々の地域色



第2図 磨製石斧の断面形状による分類

第4表 柵畑遺跡出土磨製石斧の形態分類

	I	II a	II b	III	IV	V	不明	合計点数
中期中頭II	2							2
中期中葉I	4	1				1	1	7
中期中葉II		1						1
中期中葉III	6	4		2	1	1	1	15
中期中葉IV	1	4						5
中期中葉V				1		1		2
中期中葉VI				1				1
中期後葉I		2	1	5		1	1	10
中期後葉II	1	2		6	2	1		12
中期後葉III		2	1		1	1		5
中期後葉IV		1	1	3			2	7
中期後葉V				3				3
合計点数	14	17	3	21	4	6	5	70

の強かった土器型式は、中期後葉に至って幅広い範囲において器形・文様等に共通性を持つようになるといえる。また、同地域において曾利Ⅰ式期とⅡ式期の間に竪穴住居製作時の柱穴配置の型式の画期が、曾利Ⅱ式期とⅢ式期の間に炉の形態の画期があるとの指摘もあり（長谷川2005）、中期中葉から中期後葉にかけての時期は縄文時代において、人々が柔軟に周囲の技術を受容し、生活様式を変化させていった時期であるといえよう。柵畑遺跡にみられる磨製石斧の形態の変化もそういったライフスタイルの転換の中で、当時の人々が柔軟に技術を受容していった結果であると理解することができる。

縄文時代中期において磨製石斧は、機能に即した「形」がある程度完成され、幅広く共有されたと思われる。形という視点から磨製石斧を見ると、ある程度の基準は存在するものの比較的寛容に当時の人々は変化を受け入れていたようである。

2. 石材

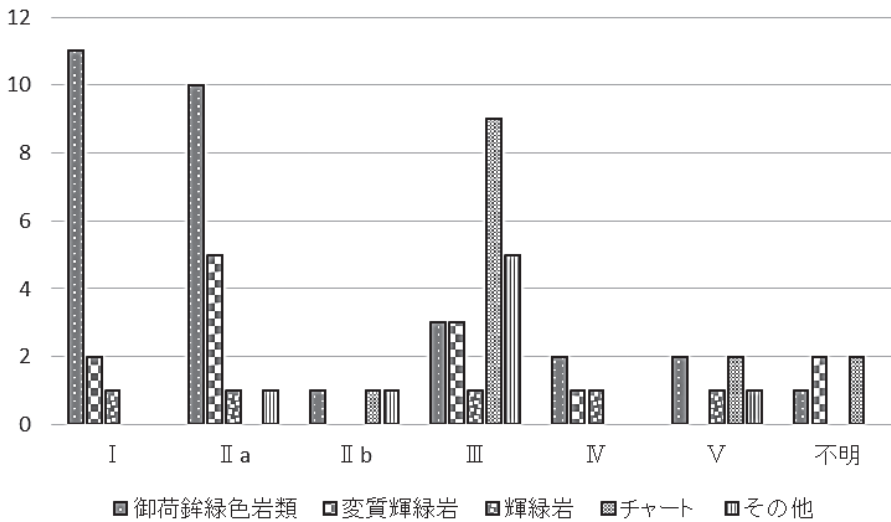
柵畑遺跡から出土した磨製石斧に用いられている石材は報告書（柵畑遺跡発掘調査団1990）に基づけば、御荷鉾緑色岩類・チャート・変質輝緑岩・輝緑岩・粘板岩・超塩基性岩類・硬砂岩・緑泥片岩・石墨片岩・ヒスイの10種であった。その内訳は第5表のとおりである。

柵畑遺跡出土磨製石斧の製作の際に使用された石材は、概ね御荷鉾緑色岩類・チャート・変質輝緑岩・輝緑岩の4種である。先述した形態に照らし合わせた石材の内訳が、第3図である。本遺跡においてチャートは、乳棒状磨製石斧には全く使用されておらず、定角式磨製石斧系統の石斧に特徴的に使用されていた。また、乳棒状磨製石斧系統の石斧はほとんどが御荷鉾緑色岩・変質輝緑岩・輝緑岩の3種の石材で製作されていたが、定角式磨製石斧系統の石斧はチャー

縄文時代中期における磨製石斧の特徴

第5表 柵畑遺跡出土磨製石斧の石材内訳

	御荷鉾緑色岩類	チャート	変質輝緑岩	輝緑岩	粘板岩	超塩基性岩類	硬砂岩	緑泥片岩	石墨片岩	ヒスイ	不明	合計点数
中期初頭Ⅱ	2											2
中期中葉Ⅰ	5		1	1								7
中期中葉Ⅱ	1											1
中期中葉Ⅲ	6	1	5	1					1		1	15
中期中葉Ⅳ	3		1	1								5
中期中葉Ⅴ	1					1						2
中期中葉Ⅵ		1										1
中期後葉Ⅰ	1	6	2	1								10
中期後葉Ⅱ	7	2		1				1			1	12
中期後葉Ⅲ	1		1	1			1				1	5
中期後葉Ⅳ	2	2	1		1					1		7
中期後葉Ⅴ		2	1									3
合計点数	29	14	12	6	1	1	1	1	1	1	3	70



第3図 柵畑遺跡出土磨製石斧の形態と用いられた石材の内訳

トを主として、乳棒状磨製石斧系統の石斧よりやや多種類の石材で製作されていたようである。磨製石斧の形態の変化は、使用する石材の選択にも変化をあたえたと思われる。

柵畑遺跡出土打製石斧 80 点に使用された石材は、報告書（柵畑遺跡発掘調査団 1990）によれば硬砂岩・石墨片岩・輝緑岩・緑泥片岩・変質輝緑岩・粘板岩・砂岩・泥岩・御荷鉾緑色岩類・緑色片岩・泥質ホルンフェルス・玄武岩・絹雲母片岩・安山岩の 14 種類で、その内訳は第 6 表の通りであった。柵畑遺跡において、磨製石斧に用いられた石材と打製石斧に用いられた石材の比較から、磨製石斧製作時において打製石斧製作時よりもこだわりをもって石材が選択されていたといえよう。

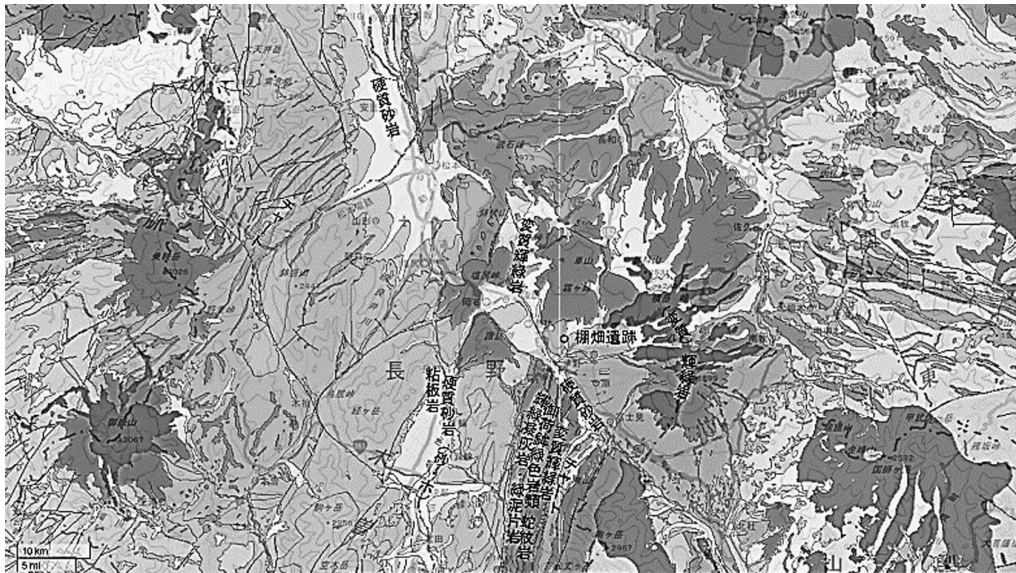
磨製石斧製作において特定の石材が選択的に用いられていることは、先行研究においてもた

びたび指摘されてきた。古くは八幡一郎が、長野県上伊那郡・長野県南佐久郡の乳棒状磨製石斧について、上伊那のものは「概ね緑泥片岩質」、佐久のものについては「殆どすべて緑泥片岩質」の石材を用いて製作されていると指摘した（八幡 1938 : 215-216 頁）。定角式磨製石斧についても、

第6表 棚畑遺跡出土打製石斧の石材内訳

石材名	点数	石材名	点数
硬砂岩	15	御荷鉾緑色岩類	2
石墨片岩	14	緑色片岩	1
輝緑岩	10	泥質ホルンフェルス	1
緑泥片岩	9	玄武岩	1
変質輝緑岩	9	絹雲母片岩	1
粘板岩	6	安山岩	1
砂岩	5	不明	2
泥岩	3	合計点数	80

製作において蛇紋岩やそれに類似した石材が選択されたとする報告・研究も多い。また、特定の石材を求めて縄文人が広範囲にわたるモノのやり取りを行っていたことは、黒曜石やヒスイの流通の研究からも明らかである。棚畑遺跡出土磨製石斧の石材の中でも主体を占める御荷鉾緑色岩類やチャートも、地質図によれば棚畑遺跡の立地する土地の上方にこれらの石材を産出する場がない（第4図）。転石等の自然な状態で入手することは不可能な石材であるため、当時の人々が磨製石斧に使用する石材を入手するために、産出地もしくは転石がある地まで自身で出向いたか、流通によって石材あるいは製品を入手したかのどちらかの方法を採ったことは明らかである。磨製石斧製作において、当時の人々がある程度の労力よりも石材へのこだわりを優先していた可能性は、磨製石斧の特徴を考える上で重要な手がかりであるといえる。しか



第4図 棚畑遺跡周辺地質図

しながら、柵畑遺跡出土磨製石斧の石材は、ある程度のこだわりをもって選択されたようではあるもののトータルでみれば10種を超える石材が用いられている。特徴という観点から柵畑遺跡出土の磨製石斧をみると、石材は「木を加工する道具」としての磨製石斧の機能を果たしうる強度やある程度のこだわりを満たせば代替可能だったと考えられ、少なくとも柵畑遺跡の資料を用いた分析の結果から言えば、石の種類というものを磨製石斧の特徴として捉えることは困難であるといわざるをえない。

3. 色

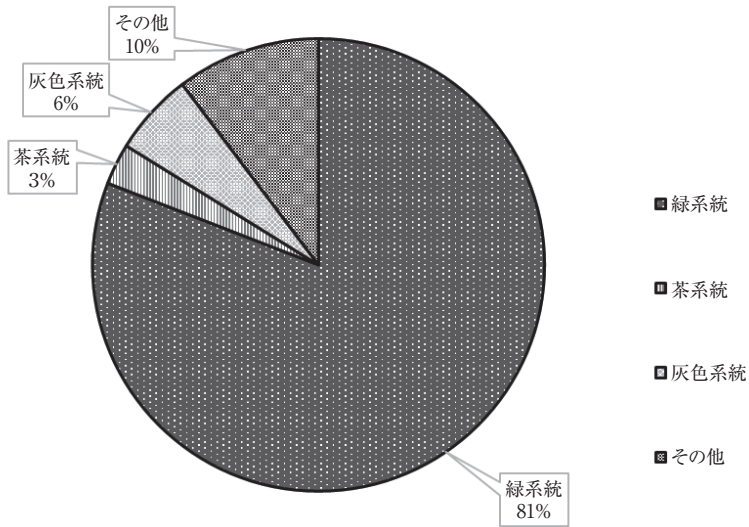
柵畑遺跡出土の実見で確認することのできた磨製石斧68点について「色」という観点から調査・観察を行った(口絵参照)。色は『JIS Z 8721-1985 準拠標準色票』(日本規格委員会・JIS色票委員会編1961)を用いて、カラーチャートと遺物の色を照らし合わせるという方法で鑑定し、『COLOR ATLAS 5510 世界慣用色名色域辞典』(城編1986)を用いて色名を判定した(第1表)。

「色」という観点から柵畑遺跡出土磨製石斧を分類すると、緑系統の石材が用いられているものが81%、灰色系統の石材が用いられているものが6%、茶系統の石材が用いられているものが3%、その他が10%という内訳となった(第5図)。磨製石斧の石材について、色という観点からみると、そのほとんどがGreen、日本語名で言えば「緑色」の系統に属するものであった。一部、茶色やクリーム色を呈する磨製石斧も見られたが、これらの多くは長期の埋没によって変色したものである可能性がある。磨製石斧の色の鑑定の結果から、柵畑遺跡の人々は、磨製石斧を製作する際に緑色の石を好んで利用していたようであることがわかった。

色という観点から分類した磨製石斧について、形態・石材について行ったのと同様に、時期ごとの分類もおこなった(第7表)。その結果、柵畑遺跡において、磨製石斧製作の際に緑色の石が選択されるという傾向は、中期初頭Ⅱ期から中期後葉Ⅴ期までの、中期中葉Ⅳ期を除くすべての時期に共通してみられる傾向であるということがわかった。柵畑遺跡の磨製石斧について、中期中葉末から中期後葉にかけて形態の転換がみられること、形態の転換に伴い、選択される石材の種類が転換していくようであることは先述したが、この緑の石が選択されるという傾向は、上述してきたような形態の選択の転換や石材の選択の転換期においてもほとんど変化しておらず、当該遺跡の磨製石斧に普遍的にみられる傾向であるといえる。

また、柵畑遺跡出土打製石斧についても、磨製石斧と同様に色という観点から分類を行った。柵畑遺跡から出土した打製石斧に使用された石材の色は、緑系統が42%、灰色系統が40%、黄色系統7%、茶系統・青系統が共に3%、ピンク系統2%、その他の色のものが3%であった(第6図)。打製石斧においては、石材の色として、緑系統と灰色系統が選択されることが多かったようであるが、磨製石斧の石材選択にみられるような、顕著に緑色の石を選択するという傾向はみられなかった。

以上より、柵畑遺跡の磨製石斧製作に際して、「緑色である」ということに意識が置かれて石材が選択されていたということがわかった。また、縄文時代において、当初は磨製石斧と同

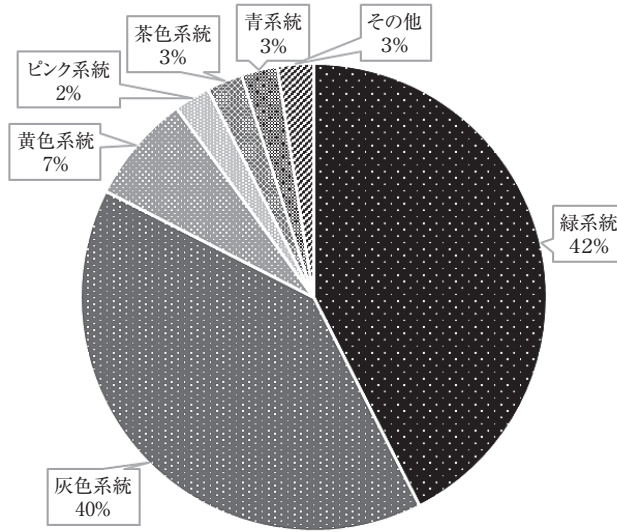


第5図 棚畑遺跡出土磨製石斧の色による分類の内訳

第7表 棚畑遺跡出土磨製石斧の色による内訳（時期別）

	緑系統	茶系統	灰色系統	その他	合計点数
中期中頭Ⅱ	2				2
中期中葉Ⅰ	6	1			7
中期中葉Ⅱ	1				1
中期中葉Ⅲ	11	1	1	2	15
中期中葉Ⅳ	4			1	5
中期中葉Ⅴ	2				2
中期中葉Ⅵ				1	1
中期後葉Ⅰ	9			1	10
中期後葉Ⅱ	9			2	11
中期後葉Ⅲ	4		1		5
中期後葉Ⅳ	4		2		6
中期後葉Ⅴ	3				3
合計点数	55	2	4	7	68

縄文時代中期における磨製石斧の特徴



第6図 棚畑遺跡出土打製石斧の色による分類の内訳

様に伐採具としての機能をもっていたと考えられている打製石斧については、このような意識に基づいた選択は確認できず、緑色の志向というのは磨製石斧固有の特徴である可能性がある。

Ⅲ. 考察

1. 磨製石斧作成時における縄文人の選択

棚畑遺跡出土磨製石斧について、形態・石材・色という視認可能な3つの観点から分析をおこなってきた。その結果として① 棚畑遺跡の磨製石斧の形態については、中期中葉から中期後葉の間で転換が見られる。② 石材については、特定の種類を好んで選択しているようではあるものの、「決まり」のようなものは見られない。③ 乳棒状磨製石斧・定角式磨製石斧共に、素材は「緑」のものが選ばれているようであり、この傾向は縄文時代中期の棚畑遺跡において普遍的な傾向であった。④ 打製石斧については「緑」の石材がとくに選択されておらず、「緑」の石材が選択されるのは磨製石斧の特徴である可能性が高い。という4つの結論をえた。

本稿においては、形・石材・色の3点に着目し、棚畑遺跡出土磨製石斧の分析を行った結果から、磨製石斧製作の際において形や石材の種類よりも色、つまり「緑」であるということに価値がおかれていた可能性を提示したい。従来、磨製石斧製作において、緑色泥岩や緑色片岩・蛇紋岩といった石が好んで利用されていたということは先行研究において度々指摘されてきた。しかしながら、今回の分析の結果からは、緑であるがゆえにこれらの石が好んで選択されていた可能性が導き出された。

なお、先述の通り八幡一郎は、長野県上伊那郡・長野県南佐久郡の乳棒状磨製石斧について、

上伊那のものは「概ね緑泥片岩質」、佐久のものについては「殆どすべて緑泥片岩質」の石材を用いて製作されていると指摘した（八幡 1938）。磨製石斧製作において緑の石が選択されているという傾向は、棚畑遺跡に限定した特徴というわけではなさそうである。

従来のように、磨製石斧に使用された石材を石の種類で捉えることは、流通等の研究において必要であるが、今回の分析の結果を踏まえると、石の種類にのみにとらわれて磨製石斧を見ることは磨製石斧の特徴を見誤ってしまう危険があると考ええる。

2. 縄文人と緑

磨製石斧製作時において、「緑」色の石が好んで選択されていた可能性を指摘した。では、縄文人はなぜ「緑」の石を選択したのか。

縄文人がどのように色を認識していたかの実態は、現在の研究では明らかになっていない。しかしながら、縄文人が「緑」に当てはまる色を認識し、好んでいた可能性は極めて高いと考ええる。

縄文時代において、緑が特別視されていた可能性を示す遺物に、ヒスイがある。縄文時代において装飾品等に加工され広域にわたり流通したヒスイのほとんどは、糸魚川・青海地域周辺に由来するとされている（ヒスイ文化フォーラム委員会 2003）。産出地の限定されるヒスイが、各地の縄文遺跡から見つかることから、流通を促進し、「威信材」的な役割を果たしていたことも想定されている（小杉 2003：11 頁）。縄文時代の遺物としてのヒスイは、そのほとんどが緑または緑をやや含む白色を呈するものであり、ヒスイといえば緑というイメージが定着しているが、ヒスイには、白・淡紫・青・黄・橙・赤・黒・灰色というものも存在している（ヒスイ文化フォーラム委員会編 2003, 宮島 2010：145 頁）。縄文時代において使用されたヒスイのほとんどが、糸魚川・青海地域周辺を産地とするものであるということは先述したが、糸魚川・青海地域においても、白・淡紫・青・黒・灰色といったヒスイが産出している（宮島 2010：145 頁）。しかしながら縄文人が利用したヒスイは、そのほとんどが緑色を呈するものである。また、日本においてヒスイの産出地は、糸魚川・青海地方以外にも存在しているが（宮島 2010：145 頁）、それ以外の地のヒスイが利用されていないことについて、「古代日本の玉文化」というシンポジウムの中で、「それらのヒスイはいわゆるヒスイ色をしていない」ため縄文人によって選択されなかったとの見解がなされている（小林編 2006：139 頁）。縄文時代のヒスイ利用において、緑色であるという特徴がヒスイの価値につながっていたことは、ほとんど間違いなからう。そして、その価値ゆえに、ヒスイは縄文時代において希求されたと思われる²⁾。

縄文人にとって緑の石は、広域流通が展開されるほどの魅力をもったモノであったようである。縄文時代において、ヒスイと同様に緑の石が選択されるという特徴をもっていたと考えられる磨製石斧についても、縄文時代において何らかの価値が付与されていた可能性は高い。

先行研究を援用すれば、前期末～中期初頭に、北陸地方や長野県北部において、定角式磨製石斧に類似する形態の特徴をもつ「玉斧」という石製品が見られるようになる（長崎 1984）。

中期中葉には、磨製石斧の大規模製作遺跡が成立し、北陸地方を中心として蛇紋岩製定角式磨製石斧が拡散し（長田 2012：67 頁）、また、ヒスイが各地で確認されるようになるのも中期中葉であるが（小林編 2006：131 頁）。同時期には群馬県下鎌田遺跡にみられるように、関東地方において定角式磨製石斧製作遺跡が出現し（長田 2012：67 頁）、また、東北地方においては、「斧状土製品」と呼称される磨製石斧に類似した形態的特徴をもつ土製品が製作されるようになる（阿部 2012：1 頁）。そして後期以降には、オオツタノハやベンケイガイといった貝製装身具・硬玉製大珠といった「第二の道具」と捉えられる遺物と同様に、定角式磨製石斧もデボの存在が確認されるようになる（田中 1995）。

棚畑遺跡出土磨製石斧の形態が、中期中葉から中期後葉にかけて転換しているということは先述したが、先行研究の知見も援用すると、中期という時期は、磨製石斧のもつ価値が徐々に変化していった時期であったといえるのではなかろうか。つまり、当初木材加工具として登場した磨製石斧に、それとは異なる価値が、何らかの原因によって付加されていったのが中期であったと考えられる。蛇紋岩定角式磨製石斧にみられるような広域流通や、玉斧・斧状土製品にみられるような磨製石斧類似品の製作は、縄文人が磨製石斧に「特別な興味」を抱いていた結果であろう。このような「特別な興味」は磨製石斧広域流通の原動力となり、広域流通が行われることによって磨製石斧の価値は更に高まる、あるいは変化していったのだろう。

「第二の道具」が多数出現し、縄文人の精神的な側面の発達が指摘される縄文時代後期以降において、磨製石斧に木材加工具としての利用とは異なる価値を置いたと考えられる利用が確認されるようになる背景には、それ以前から磨製石斧が持っていた「緑」の石材を利用するという特徴に、後期以降の人々が、何らかの価値・意味を見出していった結果であるかもしれない。

IV. 結論

棚畑遺跡から出土した磨製石斧と打製石斧の分析から、① 棚畑遺跡の磨製石斧の形態については、中期中葉から中期後葉の間で転換が見られる。② 石材については、特定の種類を好んで選択しているようではあるものの、「決まり」のようなものは見られない。③ 乳棒状磨製石斧・定角式磨製石斧共に、素材として「緑」の石材が選ばれているようであり、この傾向は縄文時代中期の棚畑遺跡において普遍的な傾向である。④ 打製石斧には「緑」という石材がとくに選択されておらず、「緑」の石材が選択されるのは磨製石斧の特徴である可能性が高い。という 4 つの結論を得た。視認可能な形態・石材・色という 3 つの観点からの分析を総合的に検討したことにより、磨製石斧は形や石材の種類よりも「緑」であるということに価値が置かれていた可能性が導き出された。以上をうけて、ヒスイの例をあげながら、縄文人が「緑」という色に特別な価値を見出していたと主張した。また、先行研究を援用しながら、縄文時代中期において磨製石斧の価値が大きく変化していった可能性について指摘した。

本研究の成果は、従来個別に研究されることの多かった、形態・使用された石材・色という 3 つの観点から同一の遺物について分析を行い、磨製石斧のもつ視認可能な特徴として「緑」

の石材を用いているという結論を導き出したこと、新たな観点により得た結論から、縄文人の価値観というものに迫ろうと試みたことという2点にある。

V. 課題と今後の展望

本稿においては、棚畑遺跡出土磨製石斧という限定した資料から分析を行ったが、より磨製石斧の特徴に迫るためには、今後さらに資料数を増やし、時期幅を広げて分析を行っていくことが必要である。

また、本稿では、色という視点から縄文人の価値観に迫ることを試みたが、認知や精神性が絡む問題については検証が困難な面もあり、事例の報告や可能性の提示以上に踏み込むことは難しかった。認知や精神性といった分野は、考古遺物からの検討が難しい分野ではあるが、一方で、当時の人々を理解する上では欠かせない分野である。人々の生活の実態に更に迫るためには、目には見えない事柄を、遺物や民族事例、理化学的研究という目に見える事象を用いて、いかに論理的に述べていくかということが要求される。理化学的な分析手法、文化人類学的な調査の双方が増加し、充実してきた現代において、人間の認知や精神性といった目に見えない事柄を、いかにして目に見える形に落とし込むかということが、過去の人々のことをより深く知るための新たなステージとして要求されている。

謝辞

本稿は、2018年度に筑波大学に提出した卒業論文に加筆・修正を施したものである。執筆にあたっては主査であった常木晃先生をはじめとして副査の滝沢誠先生、三宅裕先生、谷口陽子先生には大変多くのご指導を賜った。資料調査に際しては、尖石縄文考古館の職員の皆様に多大なるご協力をいただいた。末筆ながら厚く御礼申し上げたい。

註

- 1) 同調査報告においては、木製品の観察とは別に、頭部に打痕をもつ磨製石斧の存在という欠損の観察からも、伐採具としてではなく、「ノミ」あるいは「クサビ」としての磨製石斧利用の可能性が言及されている（福井県教育委員会 1979）。
- 2) ただし、伊豆半島において、ほとんど緑が見えず白いヒスイで作られた鯉節形大珠が出土しているとの指摘（小林編 2006）もなされており、ヒスイという石材に価値が波及していった可能性もある。同様に磨製石斧についても、価値が変化していく中で、石材の種類に価値が見いだされていった可能性もある。

参考文献

- 青山和夫 2015 「マヤ文明の起源と公共祭祀—グアテマラ・セイバル遺跡の公共祭祀建築と緑色石製磨製石斧の供物を中心に—」『古代文化』第67巻第2号 53-72頁。
- 赤堀英三 1931 「磨製石斧の形態と石質との関係に就て」『人類学雑誌』第46巻第3号 81-89頁。
- 安孫子昭二 2004 「玉斧」『季刊考古学』第89号 28-30頁。

縄文時代中期における磨製石斧の特徴

- 阿部昭典 2012 「縄文時代の斧状土製品の研究」『国学院大学伝統文化リサーチセンター研究紀要』第4号 1-15頁.
- 阿部朝衛 2001 「日本における磨製石斧の生産と交換」『帝京史学』第16号 113-130頁.
- 池田 晋 2006 「縄文時代蛇紋岩製石斧の流通」『考古学研究』第53巻第3号 8-53頁.
- 今福利恵 1999 「縄文文化を体現する第二の道具」『最新 縄文学の世界』朝日新聞社 84-94頁.
- 今村啓爾・泉拓良 2013 『講座日本の考古学3 縄文時代(上)』青木書店.
- 板倉有太 2006 「磨製石斧からみた九州縄文時代前期以降の生業・居住動態」『日本考古学』第21号 1-20頁.
- 大田区立郷土博物館 2000 『ものづくりの考古学』東京美術.
- 大野雲外 1906 「石斧の形式に就て」『東京人類学雑誌』第21巻第240号 213-217頁.
- 小川岳人 2001 「乳棒状石斧の出現」『未完成考古学叢書3 縄文時代の生業と集落』ミュゼ 121-139頁.
- 長田友也 2012 「磨製石斧—製作技術の変遷と流通—」『季刊考古学』第119号 66-70頁.
- 榊原功一 2004 「井戸尻期・曾利期の住居形態」『シンポジウム 縄文集落研究の新地平3—勝坂から曾利へ—』発表要旨 146-151頁.
- 工藤雄一郎・磯部保衛・山田昌久 2002 「木器・木材加工」『季刊考古学』第81号 28-31頁.
- 小杉 康 2003 「生業としての交易活動」『考古学研究』第50巻第2号 10-27頁.
- 小林達雄編 2006『古代翡翠文化の謎を探る』学生社.
- 小林達雄 2002 『縄文土器の研究<普及版>』学生社.
- 佐原 真 1977 「石斧論—横斧から縦斧へ—」『考古学論集』松崎寿和先生退官記念事業会 45-86頁.
- 1982 「石斧再論」『古文化論集』上 森貞次郎博士古稀記念論文集刊行会 161-186頁.
- 1994 『斧の文化史』東京大学出版会.
- 山武考古学研究所 1997 『下鎌田遺跡』下仁田町遺跡調査会.
- 城 一夫編 1986 『COLOR ATLAS 5510 世界慣用色名色域辞典』光村推古書院.
- 庄内昭男 1987 「秋田県東成瀬村上埴遺跡出土の大形磨製石斧」『考古学雑誌』第73巻第1号 64-71頁.
- 鈴木次郎 1983 「打製石斧」加藤晋平・小林達雄・藤本強編『縄文文化の研究 道具と技術』雄山閣 48-59頁.
- 鈴木道之助 1981 『図録 石器の基礎知識Ⅲ』柏書房.
- 庄内昭男 1987 「秋田県東成瀬村上埴遺跡出土の大型磨製石斧」『考古学雑誌』第73巻第1号 64-71頁.
- 大工原豊 2008 『縄文石器研究序論』六一書房.
- 田中英司 1995 「日本先史時代のデポ」『考古学雑誌』第80巻第2号 1-71頁.
- 2000 「斧のある場所」『日本考古学』第9号 1-19頁.
- 2007 「デポと交易」小杉 康ほか編『縄文時代の考古学6 ものづくり』同成社 287-296頁.
- 棚畑遺跡発掘調査団 1990 『棚畑』茅野市教育委員会.
- 千々岩英彰編 1999 『図解世界の色彩感情事典』.
- 土屋崇夫 2007 「磨製石斧の供給」小杉 康ほか編『縄文時代の考古学6 ものづくり』同成社 232-239頁.
- 堤 隆 2011 『旧石器時代』河出書房.
- 勅使河原彰 2007 「縄文時代の分業の特質」『考古学論究—小笠原好彦先生退任記念論集—』真陽社 1-24頁.
- 中谷治宇二郎 1935 『日本先史学序説』岩波書店.
- 日本規格委員会・JIS色票委員会編 1961 『標準色票 JIS Z 8721-1958 準拠』日本規格協会.
- 野口義磨 1962 「玉斧」日本考古学協会編『日本考古学事典』143頁.
- 長崎潤一 2011 「石斧研究の基礎的整理—後期旧石器時代前半期—」『早稲田大学大学院研究科紀要』50

67-78 頁.

- 長崎元廣 1984 「縄文の玉斧」『信濃』第36巻第4号 38-62頁.
- 長谷川豊 2005 「竪穴住居設計仕様の視点から」セツルメント委員会編『縄文研究の新地平—勝坂から曾利へ—』考古学リーダー6 六一書房 144-153頁.
- 早川正一 1983 「磨製石斧」『縄文時代の研究 道具と技術』雄山閣 60-74頁.
- ヒスイ文化フォーラム委員会編 2003 『ヒスイ文化フォーラム 2003』.
- 福井県教育委員会 1979 『鳥浜貝塚—縄文前期を主とする低湿地遺跡の調査1—』.
- 藤森栄一 1971 「乳棒状石斧論」『一志茂樹博士喜寿記念論集』一志茂樹先生喜寿記念会 757-774頁.
- 堀越正行 1985 「縄文時代における分業の問題」『論集 日本原史』吉川弘文館 329-350頁.
- 益富壽之助 1955 『原色岩石図鑑』保育社.
- 三上徹也 1998 「長野県における中期中葉土器から後葉土器への移行と問題点」『第11回縄文セミナー 中期中葉から後葉の諸様相—記録集—』60-68頁.
- 宮島 宏 2010 「糸魚川ジオパーク ヒスイ探訪ジオツアー 謎多きヒスイを多角的に楽しもう」『地質学雑誌』第116号 143-153頁.
- 三山らさ・磯部保衛・山田昌久 2002 「磨製石斧」『季刊考古学』第81号 23-27頁.
- 森川昌和・山田昌久 1976 「縄文前期の石斧柄」『季刊どるめん』第10号 33-43頁.
- 山田康弘・国立歴史民俗博物館編 2017 『縄文時代 その枠組・文化・社会をどう捉えるか?』吉川弘文館.
- 八幡一郎 1938 「日本の乳棒状石斧」『人類学雑誌』第53号第5号 215-229頁.

図版出典

- 第1図 カシミール3d (www.kashmir3d.com) をもとに筆者作成。
- 第2図 土谷 2007: 232 頁をもとに筆者作成。
- 第3図 筆者作成。
- 第4図 20万分の1 シームレス地質図 (<https://gbank.gsj.jp/seamless/2d3d/>) をもとに筆者作成。
- 第5図～第7図 筆者作成。

表出典

- 第1表・第2表 筆者作成。
- 第3表 棚畑遺跡発掘調査団 1990: 640 頁を一部改編し筆者作成。
- 第4表～第7表 筆者作成。

平澤愛里 (富士見町役場)

Properties of Polished Stone Axes in the Middle Jomon Periods:
A Case Study of the Tanabatake Site in Chino, Nagano

HIRASAWA, Airi

Polished stone axes in the Jomon periods have been the subject of extensive study. The discovery and analysis of wooden axe handles at Torihama Kaizuka in the 1970s was an epochal event. It was concluded that polished stone axes played the role of woodworking tools during the Jomon period. Conversely, research in recent years suggests wide-area distribution and caching, which may indicate that polished stone axes in the Jomon period were assigned speculative value. In order to better understand the value of polished stone axes different analysis is needed.

This paper, analyzes stone axes excavated from the Tanabatake site in Chino, Nagano from three perspectives: form, kind of stone, and color, and considers the property of polished stone axes through comprehensive analysis.

Analysis revealed the following: 1) A morphological change is seen from the mid-middle to the end of the middle sub-phase. 2) There is a preference for the type of stone, but there is no set rule. 3) It seems that green was often selected as the color of the stone. 4) Green stones do not tend to be particularly favored by chipped stone axes.

Analysis revealed that green stone was selected as the material of polished stone axes. In addition, there is the possibility that the value of polished stone axes changed during the middle and late Jomon period due to green stone being selected for polished stone axes.